様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ３０ 年　 ６ 月　 ６ 日現在

機関番号：３２６８６
研究種目：基盤研究(B)（一般）
研究期間：2015～2017
課題番号：１５Ｈ０３２０１

研究課題名（和文）日本のネイチャーライティングにおける交感表象の歴史的様相

研究課題名（英文）Historical Aspect of the Idea of Correspondence in Japanese Nature Writing

研究代表者
野田　研一（NODA, Kenichi）

立教大学・名誉教授・名誉教授

研究者番号：６０１４５９６９

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　7,300,000円

研究成果の概要（和文）：日本におけるネイチャーライティング研究やエコクリティシズムの展開にとって、「日本のネイチャーライティング」の歴史的定位と体系化は必須であり、次の3点に関し大きな成果があった。１．近代「日本のネイチャーライティング」の歴史的な見取り図を確立できた。２．「交感表象」のあり方、概念がネイチャーライティングにおける記述対象であり主題であり核心部分であるという考え方のもとに、ネイチャーライティングにおけるノンフィクション性＝経験性の内的構造を明らかにすることができた。３．近代日本文学におけるネイチャーライティングおよび交感概念の「歴史的様相」を調査・把握し、複数の新たな視座を発見することができた。

研究成果の概要（英文）：An attempt to approach to Japanese nature writing and ecocriticism requires to discuss “Japanese nature writing” in terms of historical contexts so as to develop it into a part of the entire literary history. Consequently, this research project has mainly succeeded in clarifying three things:
1. Historical context and configuration of “Japanese nature writing” in modern era. 2. How nonfictionality, which is deeply related to the writers’ direct experience, functions as a literary device in the genre called nature writing, when presupposing that the idea of “correspondential relationship” between human and nature is the subject matter to be written about. 3. Several historical aspects found in the modern Japanese nature writing as well as in the concept of “correspondence.”

研究分野：アメリカ文学、環境文学

キーワード：ネイチャーライティング　交感表象　歴史的様相　エコクリティシズム　環境文学

１．研究開始当初の背景

「ネイチャーライティング(nature writing)」という文学ジャンルは、「自然に関するノンフィクション･エッセイ」(nonfiction essay on nature)を指す。「自然を主題とすること」および「ノンフィクションであること」がその基本的要諦であるが、「ネイチャーライティング」というジャンルはその「ノンフィクション性」ゆえに近代文学における傍流に配されてきた。アメリカ合衆国では、1990年代初期に、このネイチャーライティングというジャンルに学術的な注目が集まり、1996年にはJohn Elder (ed.), *American Nature Writers*(2巻本) が刊行され、約120名にのぼるネイチャーライティングの作家を歴史的に集成し、その後の爆発的ともいうべき批評理論すなわちエコクリティシズム（環境文学研究）の展開を基礎づけた。

「日本のネイチャーライティング」研究は、1990 年代アメリカにおける上記の展開の影響を承けるかたちで英米文学研究者を中心として進められてきた。2000 年代に入るとエコクリティシズムが国際的な広がりを見せ、その過程で比較文学･比較文化的な視点による研究も徐々に輩出するようになった。アメリカにおける批評理論の展開を基礎にしながら、自文化におけるネイチャーライティング研究に目を向けて比較的な考察を進める動きが国際的に拡大しつつある。

２．研究の目的

「日本のネイチャーライティングにおける交感表象の歴史的様相」は、「日本のネイチャーライティング」の歴史的展開を交感表象の視点から提起しようとするものである。タイトルは３つのキーワードから成る。「日本のネイチャーライティング」、「交感表象」、そして「歴史的様相」である。その含意は、以下の3点である。（ただし、具体的な研究対象は「近代文学」に限定する。）

(1)「日本のネイチャーライティング」研究を比較文学的視点から中心化すること
(2)「交感表象」のありかた、特徴に注目し、その構造を明らかにすること
(3)(1)、(2)についてその「歴史的様相」を調査･把握すること

３．研究の方法

次の３テーマに分け、各責任者毎に研究を進め、年二回の合同研究会において発表、議論、検討を行い、共通認識を持ちつつ研究を進める。

テーマ１：「日本のネイチャーライティング」に関する歴史的定位（責任者/小谷一明）
テーマ２：日本のネイチャーライティングにおける「交感表象」（責任者/野田研一）
テーマ３：日本のネイチャーライティング」に関する国際的研究交流（責任者/結城正美）

４．研究成果

本研究プロジェクトは、「日本のネイチャーライティング」を歴史的に把握し、それを対象化する研究を本格化し、その重要性を提起する試みである。ただし、同時に環境研究における文学的アプローチの重要性を、日本近代文学を媒介として具体的に提示する試みともなる。日本における環境研究は、環境思想にせよ、環境教育にせよ、まずは「輸入学問」として始まったが、徐々に日本の現実と照合しつつローカライズする道をたどっている。文学研究の分野においても、明治近代以来の豊かな歴史的蓄積を考えるならば同断である。また、本研究は「文学からの環境研究」という位置づけのもとに展開しており、近代日本における「環境心性」あるいは「環境文化」の研究に大きな貢献を果たした。

研究成果は以下の６点に集約される。

(1) 明治 30 年前後を転換点とする、日本の自然観の「近代化」の様相を、西洋風景画の導入、紀行文や美文の成立、そして言文一致体など近代小説成立の諸条件と関連づけながら考察することができた。
(2) 昭和 20 年以降の戦後文学（例：大岡昇平『野火』、『レイテ戦記』など）における自然記述の様態を分析することにより、国木田独歩『武蔵野』以降の近代文学的自然記述様式の継承と変容の様相を把握し、それを歴史的・社会的なコンテクストにおいて理解することができた。
(3) 日本近代のネイチャーライティングが内包する特性―散文性と詩的言語（詩的機能のレトリック)、一次的経験の言語化、言及指示性と透明性―などが矛盾し合いしながら共存する様態を具体的な作品の分析を通じて明らかにした。
(4) 自然との一次的な接触・交感体験の記述は、その経験の一次性を通じて、自然の他者性、野生性への認識を開く回路となっていることを解明し、

交感体験とはたんなる自然との「一体化」論でも「融即」論でもなく、むしろ他者性の露出であり、「主体の二重化」という複雑な機制にかかわる問題であることを突き止めた。

(5) ネイチャーライティング研究における「紀行文」ジャンル、すなわちトラヴェルライティングの重要性と類縁性を見いだすことができた。それは近代以前の「紀行文」の系譜と接点をもつ歴史的意義ばかりでなく、近代以降の「移動」(＝旅行文学)をめぐる記述様式の大きな転換にも深く関わる問題であることが明らかになった。その意味で、ネイチャーライティングとトラヴェルライティングは、いずれも「移動」を基軸とする文学ジャンルとして共通の土台を有している。また、西欧近代における新興ジャンルであり、文学の圧倒的な様式となった小説(novel)というジャンルとの間にも類縁性を有する可能性を提起できた。

(6) 日本近代文学史をネイチャーライティング研究の観点から整理するためのいくつかのキーとなるファクターを明らかにすることができた。なかでも「遠近法」的記述様式の成立と変容が近代における自然記述様式における注目点となることが明らかとなり、他方で「遠近法」からの逸脱、離脱の様式との葛藤関係を捉えることができた。

なお、研究期間の最後となった2017年度末に、プロジェクト参画者全員による研究成果報告書をまとめた。以下、その情報を記載する。

野田研一編「日本のネイチャーライティングにおける交感表象の歴史的様相」科学研究費補助金基盤研究(B)課題番号:15H03201研究成果報告書(非売品)、全118頁、2018年3月15日刊。また、2018年度には上記報告書に基づく成果論文集を公刊する予定である。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 3 件）

① 野田研一、大自然の歳時記-石牟礼道子の他者論的転回、現代思想、2018年5月臨時増刊号　総特集　石牟礼道子、VOL.46-7、査読無し、2018、107-119

② 中村邦生、夕陽が身にしみる（その１）、黒の会手帳１巻１号、査読無し、2017、23-26

③ 中村邦生、〈虚構〉の断章、または残照の記憶、日本文学研究、大東文化大学日本文学会56巻、査読あり、2017、119-125

〔学会発表〕（計 13 件）

① 野田研一、交感と他者性―ネイチャーライティング再考、シンポジウム・生命と環境-東アジアの文学と文化、2017年、清華大学

② 野田研一、環境文学への視座-日本古典文学をめぐって、2017年度ASLE-Japan/文学・環境学会全国大会、2017年、清泉女子大学

③ 小谷一明、、植民地と廃墟から立ち上がる風景－日野啓三の戦後風景論、第五回中日韓朝言語文化比較研究国際シンポジウム、2017年、延辺大学

④ Yuki Masami, “Reading the Underground: Coal Mining, Nuclear Waste, and the Anthropocene.” Seminar on Ecological Imagination and the Responsibility to Act. 2017年, Shanghai Normal University

⑤ 野田研一、交感の文学―ネイチャーライティング、第9回つなぐ人フォーラム、2017年、公益財団法人キープ協会、清泉寮

⑥ 野田研一、失われる他者の時間-ネイチャーライティング、ノンフィクション、他者、広東外語外貿大学日本生態文学研究シンポジウム、2016年、広東外語外貿大学

⑦ Kenichi Noda, “Landscape into Land: The Discovery of Pre-landscape and Romanticism.” 2016年、浙江工業大学生態文学研究会、浙江工業大学

⑧ Yuki Masami, “Nature Writing and Japan. The International Symposium on Literature and Environment in East Asia,” 2016年, Dongguk University

⑨ 結城正美、汚染と家郷―水俣、チェルノブイリ、福島、広東外語外貿大学日本生態文学研究シンポジウム、2016年、広東外語外貿大学

⑩ Yuki Masami, “Nature Writing: The Radical, the Traditional, the Transnational.” The Association for the Study of Literature and Environment in ASEAN Launching Symposium, 2016年, National University of Singapore

⑪ 結城正美、セッションⅠ：文学・映像のエコロジー–的想像力、国際シンポジウム：文化に媒介された環境問題—東アジア関係学のエコロジー的探究、2016年、名古屋大学

⑫ 小谷一明、原発のある風景—水上勉の『故郷』を読む、ASLE-J/文学・環境学会2016年度第22回全国大会、2016年、AOSSA福井市地域交流プラザ

⑬ 結城正美、“American Nature Writing in Japan.”ACLA Annual Meeting. 2016年、 Harvard University

〔図書〕（計 15 件）

① 野田研一、松本悠子、生井英考、遠藤泰生、久保文明、小檜山ルイ、長畑明利、相沢亘、会田弘継、石山徳子、大津留智恵子、岡崎乾二郎、小塩和人、川上高司、川島浩平、金原恭子、後藤和彦、佐々木卓也、佐藤千登勢、佐藤良明（他278名）、丸善出版、アメリカ文化事典、2018、956（568-569）

② Hisaaki Wake, Keijiro Suga, and Yuki Masami, eds. Marjorie Rhine, Ronald Loftus, Alex Bates, Koichi Haga, Daisuke Higuchi, Margherita Long, Christine Marran, Kyoko Matsunaga, Livia Monnet, Doug Slaymaker, Shuji Takazawa, Toshiya Ueno, Lexington Books. *Ecocriticism in Japan*. 2018, 308（1-19）

③ Peter Quigley and Scott Slovic, eds. Tim Hunt, Arnold Berlearnt, Frank Stewart, Tyler Nickl, Mark Luccarelli, Greta Gaard, Janine DeBaise, Yuki Masami, ShaunAnne Tangney, Serpil Oppermann, Cynthia J. Miller. Indiana University Press. *Ecocritical Aesthetics: Language, Beauty, and the Environment*. 2018, 219（29-142）

④ 野田研一、山本洋平、森田系太郎編著、中村邦生、小谷一明、ブルース・アレン、大城立裕、石牟礼道子、小谷一明、細野晴臣、三上敏視、中村悠子、渡辺憲司、北川扶生子、鳥飼玖美子、いと雨比呂美、管啓次郎、小峯和明、佐藤有紀、河野哲也、山田悠介、勉誠出版、環境人文学Ⅰ・文化のなかの自然、2017、371（3-66）（95-110）（113-135）（361-365）

⑤ 野田研一、山本洋平、森田系太郎編著、加藤幸子、梨木香歩、奥野克巳、矢野智司、北條勝貴、李恩善、フランソワ・スペック、結城正美、山里勝己、巽孝之、波戸岡景太、中川直子、小山亘、スコット・スロヴィック、勉誠出版、環境人文学Ⅱ・他者としての自然、2017、341（3-34）（235-248）

⑥ 結城正美、黒田智編著、生田省悟、小谷一明、カティ・リンドストロム、青田麻未、北條勝貴、湯本貴和、高木徳朗、高橋傑、吉田国光、勉誠出版、里山という物語–環境人文学の対話、2017、323（序(6)-(18)）（3-35）（67-95）（133-168）（269-316）

⑦ 中村邦生、小池昌代、波戸岡景太、関口裕昭、北文美子、佐藤真基子、伊勢功治、遠山義孝、武田徹、近藤耕人、神品芳夫、松永美穂、稲田武彦、向島正喜、山崎勉、三浦清宏、読書空間、または記憶の舞台、20世紀文学研究会編、風濤社、2017、301（65-72）（107-112）（267-270）（294-299）

⑧ Yuki Masami, Louise Westling, John Parham, Stephanie Dalley, Karen Thornier, Diboraha A. Green, Murali Sivaramakrishnan, Chris Eckermen, Allen J. Christenson, Sara Tlili（他22名）, *A Global History of Literature and the Environment*, Cambridge University Press, 2017, 459（335-347）

⑨ Yuki Masami, Ursula Heise, Jon Christensen, Michelle Niemann, Dale Jamison, Susanna B. Hecht, Judith A. Carney, Libby Lobin, Emma Mrris, Ronald Sandler（他36名）, The Routledge Companion to the Environmental Humanities, Routledge, 2017, 490（55-63）

⑩ 小谷一明、権寧俊、波田野節子、後藤岩奈、木佐木哲朗、堀江薫、田中宏、王恩美、明石書店、東アジアの多文化共生–過去/現在との対話からみる共生社会の理念と実態、2017、228（41-58）

⑪ 野田研一編著、失われるのはぼくらのほうだ—自然・沈黙・他者、水声社、2016、377（1-377）

⑫ 中村邦生、千石英世、小島信夫著、静温な日々/うるわしき日々-小島信夫長篇集成⑨、水声社、2016、453（431-453）

⑬ 小谷一明、黒田俊郎、水上則子編著、李佳、渡邉松男、福本圭介、柳町裕子、福島秩子、鈴木均、Howard Brown, 後藤岩奈、山田佳子、金世朗、権寧俊、宮崎七湖、荒木和華子、John Adamson, Patrick Ng Chin Leong, 木佐木哲朗、青木知一郎、渋谷義彦、福本圭介、石川伊織、櫛谷圭司、関谷浩史、高久由美、国際地域学入門、勉誠出版、2016、336（50-63）
⑭ Yuki Masami, Allen Bruce, Watanabe Kyoji, Ikezawa Netsuki, Toyosato Mayumi, Christine Marran, Iwaoka Nakamasa, Karen Thornber, Patrick Murphy, Livia Monnet, Ishimure Michiko's Writing in Ecocritical Perspective: Between Sea and Sky, Lexington Books, 2016,214 (vii, 1-10, 41-56)
⑮ 中村邦生、はじめての文学講義、岩波書店、2015、168（1-168）

６．研究組織

(1)研究代表者

野田　研一（NODA, Kenichi）
立教大学・名誉教授・名誉教授
研究者番号：６０１４５９６９

(2)研究分担者

小谷　一明（ODANI, Kazuaki）
新潟県立大学・国際地域学部・教授
研究者番号：５０３１３８２０

結城　正美（YUKI, Masami）
金沢大学・歴史言語文化学系・教授
研究者番号：５０３０３６９９

(3)連携研究者

中村　邦生（NAKAMURA, Kunio）
大東文化大学・名誉教授・名誉教授
研究者番号：１０１１９４２２